

No. 69 - 2024

地方史 みやざき

題字：安田尚義

発行所 宮崎市船塚 3-210-1
(宮崎県立図書館内)

宮崎県地方史
研究連絡協議会

Tel 0985-29-2954

発行者 会長 甲斐 典明

印刷所 榊ヒダカ印刷

Tel 0985-28-4113

令和6年7月23日発行

宮崎県地方史研究の更なる発展を期して

宮崎県地方史研究連絡協議会

会長 甲斐 典明

橋本孝則前会長の後を承け、令和五年七月二十六日(水)の総会にて宮崎県地方史研究連絡協議会会長の任を拝命しました。延岡史談会会長の甲斐典明でございます。本会発展のため全力で努めて参りますので、会員の皆様方のご支援ご協力方、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

さて、コロナ禍も落ち着きを見せた昨年度は本会の活動もようやく通常運営となり、五月二十六日(金)に第一回理事會、七月二十六日(水)に第二回理事會・総会、十月二十六日(木)に秋季研究大会木城大会を開催いたしました。総会では、令和四年度事業・決算報告、令和五年度事業計画・予算案、令和五・六年度の役員改選を協議いたしました。研修会では、吉本正典宮崎県埋蔵文化財センター所長に「発掘調査で明らかとなった宮崎平野の開発史」と題して講演いただき、宮崎平野と周辺の台地・段丘面との集落展開の検討課題、九州北部・瀬戸内海沿岸・四国南西部地域など時代によって様々な地域との交流のあったことをご教示いただきました。

十月には、コロナ禍で中断された秋の研究大会を、椎敏夫会長、森さち子事務局長をはじめとする木城史友会の皆様の多大なる事前準備により、実に四年ぶりに開催することができました。高城城址・根城坂古戦場・石井十次資料館・石河内前坂展望台・比木神

社巡検をつうじて木城の歴史を体感し、「石河内鹿遊弁当」など地元色豊かなお弁当を味わいました。研究発表は木城史友会谷口俊博様の「中世城郭と根城坂の戦い」でした。ただ残念なことに、大会開催に向けご尽力いただいた椎敏夫会長が三月五日に急逝されました。生前のご功績を偲び、ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

ところで、わたしたち宮崎県地方史研究連絡協議会、略して宮史連は、宮崎県内の十の史談会・史友会・郷土史会、四つの公共施設・研究団体、七名の個人会員の総計七一二名の会員からなる宮崎県地方史研究の連絡協議会でございます。そこで、会長就任にあたりあらためて宮史連会則を確認したところ、会の「目的」を記した会則第二条に、次の様に記してありました。「この会は、地方史研究に関わる機関、団体、個人の相互連携を図り、研究成果の交流並びに史・資料及び情報の交換につとめ、宮崎県を中心とする地方史研究の推進を目的とする。」これを承け、中でも學術・研究機関以外の私たち史談会・史友会・郷土史会というアマチュアの団体が日々取り組んでいる活動には、次の様な「四つの社会的役割」があると考えております。

先ず一つめが、会の活動の大本であるそれぞれの地域の歴史・地理、文化、民俗の調査・研究及び学習活動という、各会員個人々人の郷土の歴史文化に対する興味関心の充足という一義的な意味です。二つめに、会誌の発行、講演会や史跡案内などの対外活動を通じてそ

の成果を広く社会に還元し、会員だけではなく広く県民・市民・町民をも含めた社会教育、生涯学習活動の場を提供すること。三つめに、大学や學術機関、県市町村および各教育委員会や関係機関、その他文化団体や個人との連携活動による地方史研究の進展と成果の社会への還元。四つめに、史跡や先人の顕彰・保存保護活動による地域社会への貢献活動。

しかしながら、昨今の少子高齢化や人口減少、現役世代年齢の引き上げなどに加えてコロナ禍により、各種団体の活動はもろろん地域の祭礼や伝統行事などの様々な場面で全国的に進展する会員の高齢化や活動の停滞を克服し、若い世代・現役世代への会員の拡大を図る事など史談会活動に限らず現実には多くの課題を抱えております。

地域や各団体の事情・環境によって眼前の活動状況や抱える課題は多種多様ですが、「郷土の歴史と文化への飽くなき興味関心と探究心」という私たちの活動の原点に今一度立ち返り、これを発展させ進んでいくことが肝要と考えるところです。その意味からも、全国各地の史談会活動とも連携しながら宮崎県における地方史研究と史談会活動の今後について検討することができたらとも考えます。

歴史は「鑑(かがみ)」と言います。「各地域の鑑」を磨く宮史連各団体個々の活動の充実こそが宮史連全体の充実発展であることを確信し、宮史連の更なる発展を祈念いたしましてご挨拶いたします。

宮崎平野の開発史

— 先史時代集落遺跡の発掘調査成果から —

宮崎県埋蔵文化財センター

吉本 正典

1 はじめに

本稿では、一九八〇年代以降、宮崎平野部およびその周縁において実施された発掘調査成果を「開発」のキーワードのもと紹介し、あわせて、それらの発掘調査実施に至る経緯についても触れる。

2 対象地域の特徴

対象範囲である宮崎平野は隆起性の海岸平野で、都農―杉安―綾を結ぶ線で九州山地と、綾―青島を結ぶ線で南那珂山地と画される。海岸線は直線的で、大部分は砂浜となるため、入江や潟に築かれた港のほかは良港に恵まれない。

内陸部には宮崎層群を基盤とする丘陵や更新世に形成された「く原」と呼ばれる段丘が広がる。

九州山地から東に向けて流れ込む河川沿いには氾濫原が形成され、沿岸の沖積低地には列状をなして連なる砂丘列がみられる。

3 一九八〇年代以降の発掘調査略史

日本国内においては、戦後の高度成長期の前後から大規模な開発事業に伴って面的な発掘調査が行われ、膨大

な資料の整理を経て研究成果が蓄積された。これは宮崎平野部も同様である。当節では現代の「開発」行為である、一九八〇年代以降の大規模開発に対応した埋蔵文化財発掘調査の概要を述べる。

(1) 宮崎学園都市建設に伴う発掘調査

宮崎学園都市の建設は、宮崎大学のキャンパスの統合移転を中心とする地域開発事業であり、一九七〇年代から宮崎市南西部と清武町域にまたがる丘陵、台地上に計画された。計画地の総面積は約300畝、その中に所在する発掘調査対象遺跡は二二遺跡と石塔群一箇所、宮崎県教育委員会（文化課）が主体となり、一九八〇（昭和五五）年～一九八六年にかけて発掘調査が実施された。

掘り下げの結果、各時代の基準資料が得られており、その成果は4冊の報告書にまとめられている。注目すべき先史時代の集落遺跡としては、弥生時代中期の竪穴建物が検出された堂地東遺跡、縄文時代後期後葉～晩期の竪穴建物が確認された平畑遺跡などが挙げられる。

(2) 東九州自動車道（大分県境～清武JCT間）建設に伴う発掘調査

東九州自動車道は北九州市から宮崎県を経由して鹿児島県に至る高速自動車道で、その一部である大分県境～清武JCT内に所在する遺跡の発掘調査が一九九五（平成七）年～二〇一二年まで宮崎県教育委員会（県埋蔵文化財センター）によって実施された。宮

崎平野の段丘面を貫通するため多くの遺跡で遺構・遺物が確認されている。特に河岸台地上に立地する川南町尾花A遺跡、高鍋町下耳切第3遺跡、西都市宮ノ東遺跡など集落遺跡の調査では多くの成果が得られた。

(3) 大規模農地整備事業など

一九九〇年代頃から、前述の事業のほかにも大規模な土地開発が盛んに行われた。特に県内各地での農地整備事業のペースは急速で、発掘調査件数と規模は増大化の一途をたどった。そのような事業に伴う発掘調査によって、県内の中山間地や台地上で多くの集落遺跡が確認された。特に、宮崎平野西縁部に近い清武船引、上の原、田野元野などの台地では、縄文時代草創期から後期にかけての大規模な集落遺跡が確認された。また、それらより少し遅れて低地での発掘調査も行われるようになり、平野内の微地形と集落立地の関係も明らかとなってきた。

4 発掘調査による解明

遺跡は、竪穴建物や掘立柱建物などの居住にかかる施設、水田や畠などの生産関連地、区画・排水のための溝、貯蔵・廃棄など様々な機能を有する土坑（墓と認定されるものも含む）など土地に根付いた建築物・構造物（遺構）と、日常・非日常を問わず人間が製作した器物・道具（遺物）により構成される。それらは発掘調査によって姿をあらわす。

発掘調査は遺構の検出と掘り下げ、

遺物の取り上げといった記録作成を行い、周辺地形との関係にも注意を払いつつ進めるため、膨大な量の土地の記録が得られることとなる。以下、大規模な発掘調査が行われた当地域の遺跡について、調査成果を3つのトピックの形にまとめる。

(1) 縄文時代後期の生活空間

縄文時代の後期前葉～中葉（約四三〇〇～三八〇〇年前）にかけての時期は台地・段丘上で規模の大きな集落遺跡が形成される。その頃の気候は比較的安定して温暖であったと推定されており、常緑広葉樹が卓越する森林を切り拓いて居住域を設定したのである。

面的な発掘調査が行われ、多数の遺構・遺物が確認された遺跡としては、石河内本村遺跡（木城町）、野首第2遺跡（高鍋町）、上の原第1・第2遺跡、丸野第2遺跡、本野原遺跡、平畑遺跡（いずれも宮崎市）などが挙げられる。

* 集落の構造 当時期の集落は、竪穴建物と土坑によって構成される事例が多く、それに加えて規模の大きな集落では掘立柱建物や土器廃棄場もみられる。大規模集落の遺構配置に関しては、中央に広場があり、その周囲に環状を成して住居が展開するという図式が定説であったが、近年ではそのような姿は必ずしも実像とはいえないことが判明している。

竪穴建物の平面形は、遺跡によって若干の差異はあるものの、後期前葉に方形であったものが後期後葉以降は円

形に変化しており、等高線に沿って竪穴建物が築かれたこと、一つの単位時期に2〜3棟の建物で構成されていたことなどが判明している。



重複して連なる縄文時代後期の竪穴建物
(上ノ原第2遺跡)

*環境 花粉分析やプラントオパール分析といった自然科学系の分析の結果、当該期の宮崎平野部の台地・段丘上ではカシ類などの常緑広葉樹(照葉樹林)が卓越しており、定住化した集落の周辺はマツなどの二次林が広がり、居住地近くはネザサ、ススキなどの草本類が繁茂する陽当たりの良い環境であったと推測された。集落の食糧はイチイガシなどの堅果類(ドングリ)や二次林で生育するマメ類+動物・魚貝類が基本であったと考えられる(中山二〇二〇)。

は集落が不明瞭となる。その要因として気候の変化(寒冷化)やそれに伴う生活地の移動(低地への移動)などが想定されている。なお、この時期には粗放的な耕作が始まっていた可能性が高い。右葛ヶ迫遺跡(宮崎市青島)ではアワの圧痕が確認されている(小畑二〇一一)。

(2) 弥生時代の環濠集落
有名な吉野ヶ里遺跡など、集落の周囲に深い濠を巡らせる遺跡が弥生時代の列島各地で確認されている。農耕の開始と定着に伴い、やがて「クニ」への統合に至る集団間の争いが頻発したことを反映した防衛的な集落と考えられている。

宮崎平野部でも、石ノ迫第2遺跡、下郷遺跡(宮崎市)を典型とする沖積低地内の微高地上にあつて環状の周濠で囲まれた集落や、鏡遺跡(新富町)、塚原遺跡(国富町)など台地・段丘の端部を堀切で裁断することで区画した集落が確認されている。早いところでは前期末(紀元前4世紀頃)に登場し、中期中葉から後期後葉(終末期)(3世紀頃)に繁栄した。これは水田をはじめとする農耕の安定化・生産性向上とそれに伴う余剰生産の発生が背景にあると推定される。

*遺跡の立地 沖積低地内の低丘陵上に立地する集落と、台地・段丘面端部に立地するそれとの立地の違いがある。生産基盤の差異に起因するのであろう。

*集落構造 これまでに環濠内の集落構成は断片的に知られているのみであ

る。おおよそ竪穴建物と掘立柱建物を中心としており、後者は倉庫としての機能を有するものが含まれる。詳細な集落構造とその変化の究明が今後の課題である。



弥生時代中期の環濠(塚原遺跡)

(3) 生産施設と道具

生産に係る水田や畠、導水・排水のための溝、収穫物を収納する施設などの遺構と生産に係る道具について概観する。

*水田と畠 弥生時代早期(約二八〇〇年前)に属する初期の水田が都城盆地西縁に立地する坂元A遺跡で確認されている。不整形で小規模な区画の粗放な水田で、灌漑施設などは検出されていない。

古代(中世)の水田や畠の検出例は近年増加してきている。水田については畦畔や水路、取水口などの存在によって確認される。畠は筋状の畝跡によって認識できる。その他、推定ではあるが牛馬生産との関連が指摘される集落もある。

*打製石斧(石鍬) 縄文時代から弥生時代で使用される石器の中に、扁平で端部に粗雑な刃を付ける一群があり、縄文時代後期後葉から増加する。それ

らは粗放的な耕作のために用いられた土堀用の道具であった可能性が指摘されている。

*大陸系磨製石器 弥生時代にみられる大陸・朝鮮半島との類似が指摘される磨製石器で、大型蛤刃石斧(樹木の伐採具)、扁平片刃石斧・柱状片刃石斧(木材加工用)、石包丁(収穫具)、磨製石剣・石鍬(武器)などがある。

*鉄器 生産性の向上に大きく寄与した鉄器は、早い地域では前期末から普及し始める。宮崎平野に定着するのは弥生時代の後期後葉(終末期)と考えられており、中期後葉(後期終末)に属する尾花A遺跡(川南町)の集落からは一定数の鉄器が出土しており、瀬戸内海沿岸や肥後地方との交流・交易によつてもたらされた可能性が指摘されている(村上二〇一四)。

*木器・木製品 低湿地と比較して台地・段丘上の土壌では木製の道具は残りにくいですが、炭化すれば比較的良好な状態で検出される。湯牟田遺跡(川南町)の竪穴建物から出土した古墳時代初頭の炭化鋤は特筆すべき資料である。



中世水田の木杭(塚原遺跡)

5 まとめ〜これまでの成果と展望
① 宮崎平野の開墾史追究のためには

台地・段丘面と沖積低地面の集落展開（居住域の広がりの変遷の解明）が差し当たっての検討課題となる。特に後者については、海岸近くの砂丘列間の低地や沖積地内の微高地の土地利用の解明が急務である。

② 当地域の考古資料に関しては、隔絶性、保守性の強さがしばしば強調されるが、発掘調査で出土した遺物の特徴から、九州北部や瀬戸内海沿岸、四国南西部など、時代によって様々な地域との交流があったことが判明している。引き続き、水上交通と陸上交通路、およびその結節点の詳細解明を進めねばならない。

【文献】

- 小畑弘己 二〇一『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社
- 工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館編 二〇一四『ここまでわかった！縄文人の植物利用』新泉社
- 中山誠二 二〇二〇『マメと縄文人』同成社
- 村上恭通 二〇一四『二・三世紀の南九州における鉄の普及』『邪馬台国時代のクニグニ南九州』

*紙数の関係で発掘調査報告書は割愛した。掲載した写真は宮崎県埋蔵文化財センター提供。

令和五年度の活動

○令和五年五月二十六日（金）

【理事会】（県立図書館研修ホール）

ようやく新型コロナウイルスの感染状況が落ち着き、感染症法の五類へ移行した後に第一回理事会を開催しました。会長あいさつの後、令和四年度事業報告・決算報告、会計監査報告、続いて令和五年度事業計画・予算案についての協議が行われました。また、二年に一度の役員改選の年に当たって、一度の役員改選の年に当たって、改選案が審議されました。なお、理事の改選については、第二回理事会での改定を行うことで了解されました。

続いて、秋季大会を担当する地区の確認があり、今年度の県央地区（木城町）大会の実施概要について木城史友会の椎敏夫会長より概要説明があり、都城史談会一〇〇周年事業や延岡城内藤記念博物館の紹介、情報交換等が行われました。

○令和五年七月二十六日（水）

【地区別協議会・理事会・総会】

（県立図書館研修室・研修ホール）

最初に、地区別協議会・理事会が行われました。理事会では、新理事について協議され、事務局案に基づいて総会に諮ること了承されました。また、木城史友会より秋季大会に向けて視察等についても詳しい説明と質疑があり

ました。

総会では、会長あいさつ、県立図書館長あいさつ、各史談会や事務局員の紹介があり、議長を選出し、令和四年度事業報告及び決算報告、令和四年度会計監査報告、令和五年度事業計画及び予算案が承認されました。

その後、二年に一度の役員改選案が諮られ、理事会での案どおり延岡史談会会長の甲斐典明氏が新会長となるなどの改選案が総会で承認されました。新旧役員挨拶のあと、本年度の秋季大会開催担当の木城史友会から大会の概要と視察などの詳細説明がありました。

なお、各地区の団体が日頃行っている活動等についての情報交換は、時間が限られていることもあり、別紙を見てもらうことで割愛となりました。

【研修会】（視聴覚室）

総会終了後に、宮崎県埋蔵文化財センター所長・吉本正典氏による「発掘調査によって解明された宮崎平野の開発史」というテーマで講演が行われました。

【令和五年度役員】

- 会長…甲斐 典明（延岡史談会）
- 副会長…石川 正樹（高鍋史友会）
- …加藤 建夫（小林史談会）
- …神保 侃弘（日南郷土史会）
- 監事…原口 勝（佐土原郷土史会）
- …堀口 勉（串間史談会）

地区理事…柏田 公和（日向市史談会）

- …椎 敏夫（木城史友会）故人
 - …稲泉 元司（えびの市史談会）
 - …田代 義博（南九州文化研究会）
 - …佐藤 正信（個人会員）
 - …有馬 晋作（個人会員）
- 〔役員任期は令和六年度まで〕

秋季研究発表大会（県央地区）
木城大会

コロナ禍のため三年連続して開催できなかった秋季研究発表大会が、四年ぶりとなる令和五年一〇月二六日（木）に県央地区の木城大会として開催されました。

木城町役場から小丸川を挟んで南側に位置する木城町総合交流センターリバリスを会場に、県内から多くの参加者が集いました。午前中は二つのコースに分かれての史跡視察、午後からは木城町長・同町教育長などをお迎えしての開会行事や研究発表会が行われました。

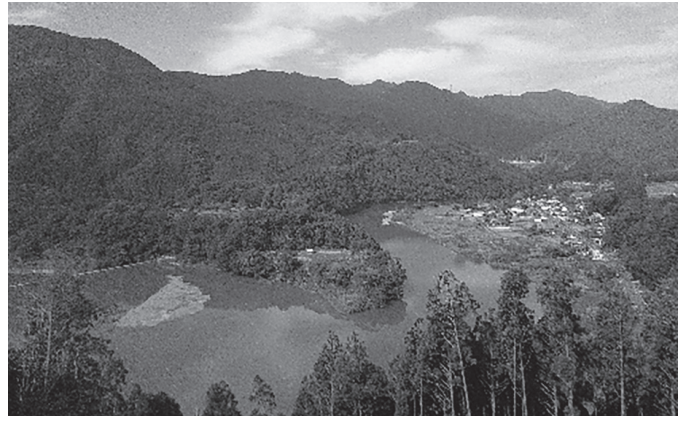
【午前】

- 木城町総合交流センターリバリスでの受付後、史跡等の視察（A・Bの二コース）が実施されました。
- Aコース…高城城址↓根白坂↓石井十次資料館※
- Bコース…石河内前坂展望台↓高城城址↓比木神社の天井画





石城跡（「新しき村」）を展望台より望む会員



石城跡（「新しき村」）の遠望（※中央にあるのが石城跡）



社殿内で天井画を見る会員



比木神社の入り口



高城城址から根白坂方面を望む

【午後】

昼食後、午後一時より木城町総合交流センターリバリスにて開会式が行われ開会のことばに続き、主催者として宮崎県地方史研究連絡協議会の甲斐典明会長、木城大会実行委員長の木城史友会、椎敏夫会長、来賓として半渡俊英・木城町長の挨拶が行われました。



開会式（壇上は木城史友会の故・椎 敏夫会長）

午後一時半からの九〇分間は、木城史友会・谷口俊博氏による「中世城郭と根白坂の戦い」と題して研究発表が行われました。
発表後には恵利修二・木城町教育長より講評があり、直後の閉会式で久々の秋季研究発表木城大会は終了・散会となりました。



谷口 俊博氏による研究発表

令和六年度
秋季県南大会のお知らせ

令和六年度の秋季大会は、県南地区（日南郷土史会）の担当です。期日と会場は未定です。決まりましたら会員の皆様の出席をお願いいたします。



事務局からのお知らせ

会誌紹介

(令和五年宮史連加盟団体刊行分)

◇縣(あがた) 延岡史談会

第三二号 令和五年五月

◇えびの えびの市史談会

第五七号 令和五年六月刊行

◇ひなもり 小林史談会

第六三号 令和五年五月刊行

◇もろかた 都城史談会

第五七号 令和五年一二月刊行

◇南九州文化 南九州文化研究会

第一三七号 令和五年五月刊行

第一三八号 令和五年一二月刊行

◇くしま史談会報 串間史談会

第三五号 令和五年二月刊行

◇宮崎県総合博物館研究紀要

宮崎県総合博物館

第四三輯 令和五年三月

◇宮崎県総合博物館年報

宮崎県総合博物館

No五二 令和五年四月

◇宮崎県立西都原考古博物館研究紀要

第一九号 令和五年三月

県立図書館よりのご案内

【展示会】

○共催展

遺跡発掘成果展二〇二四「東九州自

動車道一八遺跡 清武く西

都編」

二月一九日(水)～三月九日(日)

「遺跡発掘速報会」

三月二日(日)

共催 宮崎県埋蔵文化財センター

○特別展「中村地平の足跡」

九月二日(土)～一月二四日(日)

○企画展「若山牧水の遺墨」(仮)

一二月七日(土)～一月二六日(日)

※会場は、いずれも県立図書館二階特別

展示室、観覧無料、開室時間は、午

前九時から午後五時までです。(月

曜休館日)

ト兼映画監督

一〇月六日(日) 午後一時半～三時半

※会場は、いずれも県立図書館二階研

修ホール

講座の申込みは、事前申込みで定員

は一〇〇名。

受講料は無料。



歓談する中村地平(右)と同級生の村社講平
(写真: 宮崎県立図書館蔵)

《中村地平の略歴》

中村地平(一九〇八～一九六三)

は、宮崎市淀川町にあった商家出身

の作家・銀行家。台湾の旧制高校に

学び、校内文芸誌の創作にも参加し

た。上京して東京帝国大学美術史料

に進学し、井伏鱒二に師事して同級

生だった太宰治らと親交を深めなが

ら、執筆活動を行う。「熱帯柳の種子」

で文壇デビューし、「土竜どももぼっ

くり」など戦前・戦後を通じて三回

芥川賞候補となる。徴用により従軍

作家を経験した後、戦時中に妻子と

ともに疎開のため帰郷し、戦後は宮

崎県立図書館長や宮崎相互銀行(現

宮崎太陽銀行)社長を勤めるなど、
執筆を続けながらも宮崎県の文化や
経済の発展に尽力した。五十五歳で
自宅にて没。

【古文書講座】

「地方(じかた) 文書の世界」

第一回 六月一日(土)

第二回 七月六日(土)

第三回 八月三日(土)

第四回 九月七日(土)

講師は各回とも柘植幹雄氏(宮崎

県史料筆耕解説員)で、長野県阿智(あ

ち)村の庄屋文書をはじめ、国富町の

寺社文書等を読み解きます。

※会場は、県立図書館二階研修ホール

時間は、午後一時半から午後三時ま

で。

受講者数は先着三〇名まで。

いずれも受講料は無料。

文化講座・古文書講座ではマスク着

用は任意ですが、手指消毒等のご協力

をお願いします。

詳細は、県立図書館郷土情報担当

(〇九八五―二九二九五四)までお

問い合わせください。



○鼎談(文化講座関連の討論会)

「作家・中村地平について」

登壇者: 河原 功氏・岡林 稔氏

(宮崎大学名誉教授)・小

松 孝英氏(アーティスト)

